研究ノート

「ソクラテス」にとって「同意」とは何であったか

——プラトンの物語的対話篇における間接話法による応答様式に関する一考察——

瀧　章次

プラトンは、対話篇を制作するに当たって、戯曲のように、対話者ごとのせりふを配列する様式と、過去に起きた対話をあるひとりの語り手が語る物語的様式とを用いた[*1]。厳密に言うと、後者の物語的様式は、一人の長いせりふと見れば、前者の形式に分類される。実際、語り手ひとりの長いせりふで終わらずに、物語の聞き手が存在する様式も用いた。物語の中に、更に過去の対話の伝承者が現れることもあった。この物語的様式では、過去に起きた対話について、せりふごとに、「何某がいった」という報告の部分と直接話法による発言内容が並ぶ。また、時に、「何某がいった」の部分が取り払われて、戯曲のごとくせりふだけが配列された。物語様式には、他方、発言自体が間接話法で書かれることがあった。中でも、しばしば、問いや提案に対する「はい」や「いいえ」の短い応答は、間接話法で、「かれは肯定した」、「かれは否定した」のような形に置き換えられた。大方は、齟齬なく、「はい」や「いいえ」の代わりと読ん

*1 同名登場人物ソクラテスが過去の対話を語る対話篇は、『カルミデス』、『リュシス』、『エウテュデモス』、『プロタゴラス』、『国家』、そして偽作とされる『恋敵』、『デモドコス』、『エリュクシアス』である。同名登場人物ソクラテスの対話を別の人物が語る対話篇は、『パイドン』、『饗宴』、『パルメニデス』である。なお私は、この同名登場人物が歴史上のソクラテスと関わることは認めるが、プラトンに登場する各対話篇の登場人物「ソクラテス」が同一人格として性格づけられているという前提には、立っていない。

で理解に苦しむことは生じない。また、そう読み過ごしてしまうことが多かろう。

こうした間接の応答様式が目立つのは、物語的対話篇の中でも、『エウテュデモス』と『プロタゴラス』である。「いいえ」に対応する間接話法の応答様式は、大方慣用句で、「そうではないと言った」となるので、言い換え以上の意味を含んではいない。それに対して、「はい」に対応するものは、しばしば、「そうだと言った」のような特徴のない言い換え表現となっていない。ギリシャ語で「同意する」を意味する動詞が、直接話法の疑問文に続く。戯曲形式で、対話者Aが問い、対話者Bが「はい」と答えることには何の問題もない。しかし、物語形式で「対話者Aが『……であるか』と言った。そこで対話者Bは、同意した。」となるとどうであろうか。日本語であれば、「同意する」は、特定の人の意見に限らず、ある何らかの見解に対しても用いられるから何の問題も覚えないであろう。また、言語の使用においては、一つの使用から類似した別の使用へと類推を働かせることは一般的なことであるから、「同意する」という言葉が、主張や提案に対してばかりでなく、問いに対して使われることは、無理な拡張ではないであろう。プラトンの読者も、どうやら、何の問題もなく読んできたらしい。では、プラトンの言語使用としても問題がないのであろうか。

プラトンの対話篇において、プラトンの思想や、ソクラテスの吟味は、常に大きな問題であったが、対話篇の様式や、登場人物の応答様式についてはほとんど問題とはならなかった。プラトンの思想的発展を描くために、対話篇の制作年代が問題となったとき、文体統計学が動員され、その際、登場人物の応答様式が問題にされた。内容の乏しい形式的に代替可能なものの一群と考えられたからである[*2]。しかし、それ以降は、多様

[*2] W. Lutoslawski, 'Review of Forty-five Publications on the Style of Plato and List of 500 Publications of Plato's Style', *The Origin and Growth of Plato's Logic with an Account of the Chronology of His Writings*, London, 1897, 74–139; C. H. Kahn, 'On Platonic Chronology', *New Perspectives on Plato, Modern and Ancient*, ed. by

な応答様式の意味内容の可能性については、踏み込んで議論されていないままとなっている。

文法家の方も、応答様式の考察に関しては、さほど応援にならない。大著になると、応答様式は、疑問文に続いて項目が設けられているが、間接の応答様式になると言及がない[*3]。プラトン対話篇における応答様式は、古代ギリシャ文学における応答様式において如何に位置づけられるのか。叙事詩、悲劇、喜劇、歴史、更に、ソクラテス文学との比較研究が必要であるが、未開拓である。実際、疑問文に対する応答様式の多くは、プラトンの対話篇を例にとって考えられているわけであるから、文法家の知見を無批判に援用して、古代ギリシャ語の応答様式の一般的基準とするわけには行かない。

近年プラトンの文学様式についての研究は盛んである。なぜ論文ではなく対話篇を書いたのかという問いについては少なからず論ぜられた[*4]。しかし、なぜ、物語様式と戯曲様式があるのか、また、なぜ物語様式では、間接話法による応答が用いられているのか、これらの問いについて

J. Annas and C. Rowe, Cambridge, Mass., 2002, 93–127.

*3 R. Kühner and B. Gerth, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*, Hannover, 1898, II-2, 515–41; H. W. Smyth, *Greek Grammar*, Cambridge, Mass., 1920, 597–606; E. Schwyzer, *Griechische Grammatik*[3], München, 1966, II, 627–631.

*4 C. L. Griswold, Jr. (ed.), *Platonic Writings, Platonic Readings*, New York, 1988; G. A. Press (ed.), *Plato's Dialogues: New Studies and Interpretations*, Lanham, Md., 1993; id. (ed.), *Who Speaks for Plato?: Studies in Platonic Anonymity*, Lanham, Md., 2000; F. J. Gonzalez (ed.), *The Third Way: New Directions in Platonic Studies*, Lanham, Md., 1995; C. Gill, 'Afterword: Dialectic and the Dialogue Form in Late Plato', *Form and Argument in Late Plato*, ed. by C. Gill and M. M. McCabe, Oxford, 1996, 283–311; id. 'Dialectic and the Dialogue Form', in Annas and Rowe (n. 2), 145–171; J. Beversluis, *Cross-examining Socrates: A Defense of the Interlocutors in Plato's Early Dialogues*, Cambridge, 2000, 19–20; L. P. Gerson, '*Elenchos*, Protreptic and Platonic Philosophizing', *Does Socrates Have a Method?; Rethinking the Elenchus in Plato's Dialogues and Beyond*, ed. by G. A. Scott, University Park, Penn., 2002, 217–231; D. Sedley, 'Plato and the Dialogue', *Plato's* Cratylus, Cambridge, 2003, 1–3; M. C. Stokes, *Dialectic in Action: An Examination of Plato's* Crito, Swansea, 2005, 1–13.

は、管見の限り、まだほとんど論じられていない[*5]。

そこで、初歩的な所から一歩ずつ論を進める。一般的に、肯定か否定かを問う問いは、ある判断について肯定か否定かを問う。故に、問う人が、実際には問うていることの肯定、否定、いずれの判断に関与していないとしても、そうした問いに、答える人が肯定するならば、その場合、その肯定の対象は、その問われている判断に対してである。ある言語の十分な使い手であれば、普段に労なく対応していることである。「肯定か否定かを問う問いに同意する」ということは、そうしたことと理解することには問題がないであろう。こうした理解に従えば、「A は『……か』と言った。B は同意した。」という物語形式の問答の場面は、素通りしてしまう。しかし、同時に、同意は判断に対してであって問いそのものに対してではない点で、「問いに同意する」という言い方で済ますのには引っ掛かりがある。同じことを A と B とで繰り返しているのに、A は<問い>、B は<

*5 対話篇様式の分類は、Diog. Laert. iii.50。対話篇の様式の歴史的起源に関しては、H. Thesleff, *Studies in Platonic Chronology*, Helsinki, 1982, 53–67。物語様式並びに間接的応答様式については、H. Tarrant, 'Orality and Plato's Narrative Dialogues', *Voice into Text: Orality and Literacy in Ancient Greece*, ed. by I. Worthington, Leiden, 1996, 129–147; esp. 131–132。Tarrant は、物語形式は口承物語の名残で、プラトン独自の戯曲形式に進化する以前の形式だとする考えに立つ。物語形式の間接話法による応答様式を一般的に論じ、語りが自然で生き生きとしたものであるために用いられたと示唆する点で、直接話法の応答様式と特に区別ないものとして扱っている。物語形式における外枠の対話と本体の対話との関係について、『エウテュデモス』、『プロタゴラス』、『テアイテトス』について触れているものとしては、R. B. Rutherford, *The Art of Plato*, Cambridge, Mass., 1995, 111–112; 122–123; 274。物語様式をプラトン哲学の展開との関係で触れているものとしては、C. H. Kahn, *Plato and the Socratic Dialogue: The Philosophical Use of a Literary Form*, Cambridge, 1996, 154; 179。特に『エウテュデモス』の外枠の対話に関連しては、S. Kato（加藤信朗）, 'The Crito-Socrates in the *Euthydemus*: A Point of View for a Reading the Dialogue', *Plato:* Euthydemus, Lysis, Charmides. Proceedings of the V Symposium Platonicum Selected Papers, ed. by T. M. Robinson and L. Brisson, Sankt Augustin, 2000, 123–132。若干の言及は、T. A. Szlezák, *Reading Plato*, tr. by G. Zanker, London, 1999, 88–89。また、A. Long, 'Character and Consensus in Plato's *Protagoras*', *Cambridge Classical Journal* 51 (2005), 1–18 は、外枠の対話とソクラテスの報告との関係については論じていない。

主張する＞という非対称である。このことは、英語でも通常 Yes または No で答える疑問文に対して、“I agree.” と答えることができるかと問うと、不可能とまでは言わないが違和感があるという native の informant が多いことからも分かる。さらに、「同意」を狭く「誰か特定の人の意見に対する同意」と取る場合には、先の場面の齟齬は広がる。従って、間接話法で用いられた応答の言葉が、一般的な肯定という事柄に対応しているのか否かという古代ギリシャ語の問題を検討してみる必要がある。

もう一点形式的な問題を考える。戯曲形式であれば、応答は、直に読者に提示されており、対話者間のやりとりの解釈の問題となる。それに対して、物語形式における間接話法による応答様式は、二つの異なる点がある。先ずは、間接話法である。直接話法であれば、報告内容に何も手を加えていないが、間接話法は、発言されたその通りのものではない。手が加わっている。もう一つは、間接の応答様式は直に読者に提示されているものではない。語り手が聞き手に過去の話として物語っている。従って、語り手の聞き手との関係から、語られていることが独立していない。実際、自分自身が問答の問い手であった場合と、一聴衆であった場合とでは、「『……か』と尋ねたとき、相手は同意した」と報告するとき、「同意」の質は異なる。

多くのプラトンの読者は、以上の形式的な議論は受容れても、やはり、物語形式は戯曲形式の代替物であり、物語形式中の間接的応答様式は周辺の直接話法による応答様式の代替物であって、代替関係は単なる便宜的なことがらではないかと反問するであろう。

しかし、プラトンにとって、物語形式と戯曲形式とは便宜的な違いでしかなかったのであろうか。確かに、編集の問題としてそう思わせるヒントはある。『テアイテトス』には、奴隷によって語られる本体の対話の外側に、その対話がどう編集されて出来上がったかをエウクレイデスがテルプシオンに述べる短い対話がある（*Tht.* 142a1–143c8 (OCT, 1995))[*6]。

*6 対話篇制作様式における物語形式から戯曲形式への転換を示唆する証言と見る見方

本体の対話は、エウクレイデスがソクラテスから聞いて編集し書物としたという（*Tht.* 143b5–c6）。ソクラテス、テオドロス、テアイテトスの三人の間では問答が交わされたことが示唆されており、その問答の編集の際に、ありのままの対話を再現する上で、「そして……と私は言った」のような報告表現の部分や、間接的な応答表現を、ソクラテスが語った通りに書くと厄介であるので、取り除いたという。物語形式から戯曲形式に転換する編集を示唆する。これだけ読む限りは、今問題にしている間接的な応答表現は、単なる便宜的な代替物であると思わされる。もちろん、間接話法の応答表現は、ただ「取り去る」訳にはいかない（143c5–6）。もう一度直接話法の応答表現に書き換えねばならない。虚構の内部における「編集」の問題がある。ソクラテスがもともと差し挟んだ間接話法の応答表現はといえば、すべてではなく、一部の例として挙げられているにせよ、συνέφη と οὐχ ὡμολόγει の二つである。肯定表現と否定表現に対応するから、よくある例として挙げられていると考えるのがふさわしい。エウクレイデスがソクラテスから自ら何度も確かめたもともとの過去の問答において、この二つの応答表現が、もし、何度も繰り返されたのだとすると、そのもともとの対話とはどのようなものとなるであろうか。συνέφη はプラトン作品によくある間接的応答様式である。しかし、ὡμολόγει は肯定の多用される間接的応答様式であるが、οὐχ ὡμολόγει はこの箇所にしかなく、実際に間接的な応答様式として用いられた例はない。いずれにせよ、二つの表現を対と見る限り、また、後に触れるが、συνέφη の用法に誘われる限り、「同意した」と「同意しなかった」と取りたくなる[*7]。

に関しては、Thesleff (n. 5), 61、Tarrant (n. 5), 136。

*7 συνέφη : οὐχ ὡμολόγει の訳：'Das gab er zu' : 'Darin wollte er nicht bestimmen' (F. Schleiermacher, *Platons Werke*[3], Berlin, 1856) ; 'he agreed' : 'he did not agree' (H. N. Fowler (Loeb), 1928) ; 'he agreed' : 'he would not admit this' (M. J. Levett (tr.), *The* Theaetetus *of Plato*, Glasgow, 1928; M. J. Levett (tr.), M. Burnyeat (rev.), *The* Theaetetus *of Plato*, by M. Burnyeat, Indianapolis, Ind., 1990) ; 'he assented' : 'he did not agree' (F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1935) ;「承認した」:「同意しなかった」(田中美知太郎（訳）、『プラトン　テアイテトス』、岩波書店、

そう取ると、エウクレイデス編集前のソクラテスの自ら語ったことによれば、過去の対話で最もよく起きたことは、問答でソクラテスの提案した意見に相手が同意したり、同意しなかったりしたことと想像される。今、このことを、「編集」の問題として、実際に本体の対話で逐一検証しようというのではない。読み進めば、実際ソクラテスの提案に同意したといえる部分が多くある。寧ろ、問題なのは、ソクラテスが、後に本体の対話で、自らの問答を産婆術に喩えることだ（148e7–151d3）。問うものとして一切自分には知がない、空虚であることを強調するのである。対話相手が自らの考えを吟味するのを手助けする役割である。これは、先の間接的応答表現の示唆とどのように並び立つのだろうか。「編集」をめぐる対話は、後ろから読み返される時、先ずは、テルプシオンに、そして、プラトンの作品を読み返すことの出来る読者に、問題を提起する。いずれにせよ、語られたとおりそのままに「再現」する上で、もともとソクラテスの間接応答表現の意味する内容を減らした可能性が残ったまま「朗読」が始まる。先の応答表現は、「再現」上、「厄介なもの」、従って、不便なものともなろうが、しかし、単なる言い換えが可能か疑問をなげかける表現、つまり、対話者間の同意の質をめぐる問題を投げかける表現でもある。それゆえに、この挿話から、便宜的に物語形式が戯曲形式に転換されたとは直ちには言い難い。

確かに、文体統計による後期作品では、物語形式がなくなる。しかし、それ以前の作品が、報告部分を取り去って、間接の応答様式を直接話法に転換すると、戯曲形式となるようなものであったか。否である*8。物語形式独自の表現の可能性は、実際に発言されていることの言外にある種々

1935年）；'he concurred'：'he didn't agree' (J. McDowell, *Plato's* Theaetetus, Oxford, 1973)；'he agreed'：'he disagreed' (R. Waterfield, *Plato* Theaetetus, Harmondsworth, 1987)；'he assented'：'he did not agree' (Rutherford (n. 5), 274)。

*8 『テアイテトス』をとっても、少なくとも、『ソフィスト』、『政治家』は、その続編のみかけをしているが、当初のエウクレイデスの編集には、「若いソクラテス」の登場まで見通されていないだろう。また、戯曲形式に戻されたのは、分割・総合に関わる対話の内容の方にあったろう。

の状況描写である。戯曲形式では、状況描写をすべて発言者の発言に宛がうのは問答のテンポを殺ぐことになる。従って、対話相手の表情、態度、また、対話者自身の内心の心理などは、物語形式が独自に開拓できる領域である。実際、プラトンの物語形式の対話篇ではこの種の要素を、作品ごとに多寡はあるが、拾い集めることが可能である。それらは、作品形式が便宜的な代替形式であることを示すものではない。

それでもなお、これらの状況描写は、対話篇の中心にある実際に交わされる議論の場にとっては、周辺的な事柄ではないか。それらを除くと、結局、物語的要素は対話篇の中心となる論証にとっては何も貢献していないのではないか。そうした批判はありうる。これに答えるには、個々の物語形式の対話篇において、言外の描写のうちどこまでが発言内容を制限する条件であったのかを具体的に検証していかねばならない。従って、ここでは以下の示唆に留める。対話を進める事を制約する多くの条件や当事者同士の取り決めは、すでに発言されている事柄のうちに、戯曲形式、物語形式を問わず具体的に実際の発言で取り交わされている。また、状況描写のうち、発言の意図や相手の発言の理解をめぐる言葉は、発言のたびごとにあるわけではない。しかし、物語形式の状況描写が、語りの聞き手、延いては読者に、対話の内容を検討させる問題を提起するものであることは残る。そのひとつは、間接の応答様式である。

第二の問題は、間接の応答様式は、直接話法の単なる代替物ではないかという疑義である。物語的対話篇では、問いや提案に対する応答の部分について、あるものは、直接話法、あるものは、間接話法で表現される。ただし、圧倒的多数は、直接話法による表現である。また、『パイドン』、『リュシス』、『国家』、『饗宴』（アガトンとソクラテスの対話）では、間接話法による応答様式は僅か、『カルミデス』（cf. 154d6)、『パルメニデス』では、皆無である。『プロタゴラス』、『エウテュデモス』、また偽作とされる『恋敵』*9 において著しく現れる。ここで問題となる表現は、ὡμολόγει、

*9 偽作問題に関しては、Thesleff (n. 5), 219。

συνωμολόγει、συνέφη、συνεχώρει、συνεδόκει およびそのアオリスト形である。肯定か否定かを問う疑問文に対して、直説法・能動態・現在形・一人称・単数という遂行動詞を用いて応答する場合、肯定には φημί が、否定には、οὔ φημι がある[*10]。これに対する間接話法の表現としては、ἔφη と οὐκ ἔφη がある。これらの応答表現の間に、代替性があるのは明白である。しかし、先の 4 つの間接話法の表現についてはどうか。遂行動詞 σύμφημι、ὁμολογῶ、συνομολογῶ、συνδοκεῖ μοι、συγχωρῶ が普通に用いられていれば何の問題もなかったであろう。実際はどうか。

動詞 ὁμολογῶ は、ἔξαρνός εἰμι と組み合わせた表現で、肯定と否定の応答様式の対を表すこともある。また、誰の意見かに関係なく「承認する」の意味で頻繁に用いられる。しかし、プラトンには、遂行動詞の例は、「同意しますか」の問いに対して「同意します」と応ずる場合はあるが、肯定か否定かを問う問いに、「はい」の代わりに応ずる例は、理論的には十分可能と思われるが、ない。「問う」ことと「主張する」ことの非対称はあっても、「相手と同じことを言う」というもとの意味とするとき、ὁμολογῶ については「同意」の問題を解消できるかもしれないが、ほかのすべての動詞に推及するわけにはいかないであろう[*11]。動詞 συνομολογῶ は、古注や Hesychius では、σύμφημι と言い換えられるように、「承認する」ではなく「同意する」の意味であろうが、遂行動詞の例がない。

動詞 σύμφημι は、遂行動詞の例がある。プラトンでは、提案や主張に応答する『国家』における 4 例（403c8; 526c7; 608b3; 608b9）の他、確かに 1 例、『法律』831b2 に、肯否を問う質問に対する応答の例がある。提案の賛否に対する応答である。また、『ヒッピアス（大）』293e6 では、肯否の問いに σύμφημι と応ずることが示唆されているが、問う人の権威と独立に用いることが出来るか疑問を打ち消せない。『国家』523a7 には、σύμφαθι ἢ ἄπειπε、『ゴルギアス』500e1 には、σύμφαθι ἢ μή という二者

*10 その他、φημί と ἀπόφημι の対については、*Prt.* 360d7–8; Arist. *SE* 171b3; 181a39。φημί と ἀπαρνοῦμαι の対については、E. *El.* 1057; S. *Ant.* 443。

*11 Cf. s.v. 'agree' S. C. Woodhouse, *English-Greek Dictionary*, London, 1910.

択一の命令文があるが、その直前の発言は提案である[*12]。確かに、肯否の問いに応ずる遂行動詞の例は、ソフォクレスに1例（*Aj.* 278）あるが、肯定の答えを予期する場面である。肯否の問いに対する肯定の応答を間接的に συνέφη をもって描くことは、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』にもある（*Mem.* 2.1.5; 2.1.7; 2.2.3）。しかし、ソクラテス文学の登場人物ソクラテスの問いに対する「同意」の問題から独立ではない。プラトンの作品内では、数多くの例で、主張や提案が明示された上で、同意がなされる場面で使われている。このことを考えると、問う者が肯定とも否定ともいずれにも関与せず、肯定または否定を問う場面で、σύμφημι と応ずるのが自由だったとは結論付けられない。

動詞 συγχωρῶ は、プラトンにおいては、ὁμολογῶ と同じく、「承認する」の意味で頻繁に用いられる。承認を確認する問いに応ずる場合を除くと、肯否を問う問いに遂行動詞として応答に用いられる例は1例である（*Tht.* 189a9）。

動詞 συνδοκῶ は、συνδοκεῖ または συνδοκεῖ μοι のような形で応答表現として用いられる。同意を確認する場合を除いては、通常肯否の問いに対する肯定の応答としては、ἔμοιγε δοκεῖ または、δοκεῖ μοι が用いられる。プラトンで肯定の応答に用いられたのは唯1例『プロタゴラス』332b3 συνδοκεῖ μοι「私はあなたと同じ考えである」という例である[*13]。これは、後に触れるがプロタゴラスの戦略的な発言として特例である。従って、συνδοκεῖ が肯否の問いに対する肯定の応答表現であるとする十分な証拠は得られない。

以上の考察からすると、間接話法による応答表現のうち「同意」の意味を持つ動詞による表現は、理論上の可能性は別にして、プラトンの豊富な例が示す範囲内では、直接話法の単純な言い換えではないと言わざるを得ない。

---

*12 Cf. s.v. σύμφημι LSJ.

*13 Burnet（OCT）、Croiset（Budé）、Hermann（Teubner）とも先行する文は疑問文と取る。

以上の予備考察の上で、改めて、物語形式の対話篇で、間接話法による応答様式のうち若干のものが引き起こす問題とは何だったのか。問いに対して「はい」と応答したに過ぎないことを、「同意した」と過大に報告する問題である。過去の対話を報告する人が、間接話法の応答様式を用いて、聞き手に対して、対話の内部で、肯定か否定かを問う自分の問いに対して、ほかの直接話法による応答様式と同等の肯定の応答をしたと報告するに留まらず、その応答を、単なる応答以上の、自分の主張に対する同意として受け取ったことを示唆することである。

このような問いに対する肯定の応答を同意と見なすということは、プラトン作品に起きていることなのか。可能である。登場人物ソクラテスは、物語形式に限らず、対話篇の各所で、対話相手に向かい、想像上の問答を展開する。また、『メノン』篇では、奴隷の子供と対話することをメノンの前で展開してみせて、その対話の意義をメノンに考えさせる(82b9–86c7)。対話の外に立って対話を評価する視点に立つことは、対話の内部でも試みられている。従って物語形式の外枠の対話、すなわち、報告者と聞き手の関係において、そうしたことが試みられていても不思議ではない。

また、事実生じている。『ゴルギアス』篇で、ポロスが「不正を行うことは、不正を受けるよりも悪い」という主張について、ソクラテスの問いに対して答える過程はそうした状況の一つである（*Grg.* 474c4–475c9)。答え手は、問う人ソクラテスによって、単に自分の信念が吟味されているだけではなく、答え手の応答によって、ソクラテス自身の信念の正しさが証明されようとしていることに直面している。前もって、自分の信念と異なる信念をソクラテスはすでに表明している。その結果、ソクラテスの質問に答えながら、自分の応答から生じて来る結論が、自分の信念と反していて、ソクラテスの信念と一致すると見えてくる。問答の過程においては、どの問いにおいても、ここでは、ソクラテスは、ただ相手の信念を問うているに過ぎない。自分の立場を明確に述べてから、それに対する承認を求めるという形で問答を進めてはいないのである。

以上から、プラトンが、物語形式を通して、語り手が、過去の対話を報告するに当たって、問う人として、相手の信念を吟味しながら、実は自分自身の主張に対する同意を得ていたと聞き手に報告しうるような状況を描く可能性は十分にある。しかし、それが「同意」として実質的に何であったのかは、まさに報告される対話の聞き手にとっての問題である。

その一端は、対話篇一般の問題と関わる。「同じ言葉、考えの繰り返し」を原義とする動詞 ὁμολογῶ とその派生形の意味する内容の問題である。プラトンは、遂行動詞を用いて問うていることを明確にすることができることも（e.g. *Prt.* 358a2; *Grg.* 462d9)、問いが主張と受け取られる可能性があることも（e.g. *Grg.* 466a9–b1; 466b11–c6)、承知しているであろう。また、登場人物「ソクラテス」も、否定疑問が間接的主張になることを知っているであろう。そうした状況で、「ソクラテス」は、実に多くの対話篇で問うことに先立って自らの意見を提案する。この文脈では、対話相手の応答は、単なる「承認」以上の「同意」の意味であろう。また、「ソクラテス」は、疑問形式で問うていても、相手が、ἀληθῆ、ἀληθῆ λέγεις、ὀρθῶς λέγεις「あなたは正しく語っている」と応ずることを拒まない。相手が「承認」したに過ぎない事でも、結論が見えてくるときには、「われわれが」と盛んに一人称複数の代名詞を散りばめ、「われわれが同意したこと」に言及する。また、対話の過程で、対話相手の信念を吟味しているときでも、繰り返し「ともに考察している」という。また、その「考察」では、しばしば、「言論」（λόγος）を問題としており、「真理」を求めているとする。しかし、この過程を聞き手として、あるいは、読者として省みるとき、動詞 ὁμολογῶ とその派生形の用法は、しばしば、命題の「承認」である。そしてその「承認」が「同意」と見紛う場面も多い。また、「同意」の内容は、信念を吟味する問いに答えたことであったり、小辞 ἄρα に示唆されるように相手の答えから導き出されることであったりする。「同意」そのものにおいても、同意された内容に含まれる概念の理解においては不一致であること、すなわち、同意が破綻していることもある。

より具体的に、物語的対話篇での問題例を取り上げる。物語形式の対話篇『恋敵』は、問答の前半（132a1–137b1）において、対話相手の信念を吟味し、後半において（137b1–139a8）、提案に対する同意を求めながら問答を進める点で、所謂「ソクラテス的対話篇」と類似した構造を持っている。ここで、動詞 ὁμολογῶ の振る舞い、並びに、間接話法による応答様式は極めて紛らわしい。自説の検証のための問答の場面では（137b1–139a8; cf. 134a5–e8）、ὡμολόγει を含め間接話法による肯定の応答様式は、自説に対する「同意」を含意する。他方、対話相手の信念を明確に吟味する場面では（136b3–137b1）、ὡμολόγει（136b9; 136c1; cf. 136e2–3）は、疑問文に対する肯定の応答として用いられているが、「自分の考えに同意した」とは考えにくい。少なくとも、136e4 では、ソクラテスは哲学者が無為であることに同意するはずがないから、ἐναγκάζετο ὁμολογεῖν を、「私の意見に同意せざるを得なかった」とは取れない。137a8–9 では、ὡμολογοῦμεν で言及される「同意事項」は「あなたの論によれば」、「あなたの言うところの」と限定された内容となっている。『恋敵』はプラトンを模倣した作品にせよ、「同意」の実質があからさまに問題となっている。

『エウテュデモス』では、ソクラテスがクリトンに過去の対話を報告する形式は、単なる形式以上の実質を持つ。聞き手クリトンは、報告される対話から、論争家が徳を教えることが出来るのか吟味をすることを求められている。論争家のエウテュデモスとディオニュソドロスの兄弟が代わる代わる、問答による「徳の教育」を、まだ若いクレイニアスに行う。実質は、「学ぶ」と「理解する」の二義を持つギリシャ語 μανθάνω を用いた見かけ上の矛盾へと答え手を導く問答である。ここで、問う人はソクラテスではない。従って、二人の論争家が何を信じているか、語り手ソクラテスが確信する立場にはない。そうした状況で、276a3 以下、ソクラテスは論争家の問いに対する、クレイニアスの応答を、直接話法の「はい」、「いいえ」に混じって、間接話法で、ὡμολόγει、συνέφη とクリトンに語る。「論争家の主張に同意した」の意味とは受け取れない。論争家は、主張に関与していないからである。特に、対話の報告に先立って、272b1 で

「語られることはどんなものでも、偽の内容のものも真の内容のものも、同じように論駁する力に長けている」と聞かされている。また、クレイニアスとの対話に先立って、ディオニュソドロスがソクラテスに、「どちらの答えをとっても論駁される」と囁いたと聞かされる（275e4–6）。論争家の関心は、自らの立場を弁護することではない。相手に同じ言葉を気づかないうちに二義的に誤って使わせることである。従って、「クレイニアスが『同意』した」と聞かされること自体が、同意にせよ承認にせよ何が「同意」か問題になる。また、みかけの論駁に対して、276e3–4 で、再びディオニュソドロスとの対話において、「さっきも問われていた内容はよいことだと思われた」と言ったとソクラテスは語り、クリトンに、論争家と対比して、「みかけの論駁」以上の何かに目を向けていたことを示唆する。論争家にとって自家薬籠中の誤謬論法が別の問題の糸口であることを示している。試されているのはクリトンである。

クリトンの課題は、これに尽きない。クレイニアスを知恵を愛することへと勧奨する問答にも、間接的な応答様式は現れる。この勧奨では、提案するのはソクラテスである。従って、συνεχώρει、συνέφη と並んで、「どういうわけかわからないが」συνωμολογησάμεθα「私たちは意見の一致をみた」と 280b1 で、また、「このようなすべてのことに関して」συνεχωροῦμεν ἀλλήλοις「お互い承認しあった」と 281d1–2 で、聞かされるとき、今度は一転して同意が計らわれたかと映る。結果からみると、知恵を愛することを認めている点で目的は果している。しかし、過程の正しさは保証されていただろうか。「同意」の大本がソクラテスの提案した「素人ください」議論だとすると、議論の手順に修正を要した議論の構造の妥当性が、クリトンに問題として課せられているのである。

『プロタゴラス』篇の外枠にある対話に登場するソクラテスの友、そしてその仲間にとっても、ソクラテスの報告は、その「同意」に関して問題を投げかける*14。ソクラテスの賞賛するプロタゴラスの「知恵」（309c9–d2）

*14 Weingartner は、冒頭の外枠の対話が、プロタゴラスの「知恵」の問題ならびにソ

が何であるのかは、ソクラテスから聞かされて明らかになるはずのものである。ところが、カリアス邸におけるプロタゴラスとの対話に先立って、ソクラテスは、ヒッポクラテスとの対話から物語り始めるが、そこでは早くもヒッポクラテスのプロタゴラス崇拝に問題があることが示唆される。このヒッポクラテスの吟味は、ただ吟味に留まらず、ソフィストとは何であるのかに関するソクラテスからの提案で語り終わる。そして、カリアス邸に向かう場面転換の場で、ソクラテスは、間接話法によって、「同意」がなされたと報告するのである（δόξαν ἡμῖν ταῦτα ... (314c3)）。

このつなぎの場は、後のソクラテスの対話に関してある予断を与える。カリアス邸の門前で、道中問題になったことに関して「お互いに同意を得るまで対話をした」と語る（διελεγόμεθα ἕως συνωμολογήσαμεν ἀλλήλοις. (314c7)）。物語によくある内容を圧縮した表現である。次に動詞 συνομολογῶ が間接話法の応答 συνωμολόγει として現れるのは、相手が代わってプロタゴラスとの対話においてである（332c9）。「プロタゴラスは私の意見に同意した」と締め括るときである。συν- という標識ついた語の配置に意図があったかは断定できないが、「同意」の形成がソクラテスの対話の特徴であるかのような印象を先立って与えている。前後するが、プロタゴラスとの問答に関しては、このプロタゴラスの応答に先立って「徳は一つである」ことを巡る第一の問答が聞かされる。その問答では、第一の問いを除いて、ソクラテスはすべての問いについて自分自身の立場を明らかにして、プロタゴラスの応答を求めた（330b6–e2）。従って、ここには、συνέφη も問題なく使われている（330d4–5）。しかし、結末において、ソクラテスは、「徳は一様ではない」との立場が論駁されたことを示すにあたって、第一の問いに関して、自らは問うただけでその判断に関与していないことを際立たせる（330e9–331a1）。これによって、

クラテスの「約束」（335c4）と関わるとする（R. H. Weingartner, *The Unity of the Platonic Dialogue*, Indianapolis, Ind., 1973, 47–48）。Rutherford は、プロタゴラスの「知恵」、知恵と美しさの一致、310a5、a7 の χάρις が、本体の対話に関わるとする（Rutherford (n. 5), 122–123）。

以後の対話では、「同意」や「同意」の質に関して、問答の場にあるプロタゴラス、そして、プロタゴラスの「知恵」を測る聞き手であるソクラテスの友らにとっては、注意を傾けるべき事柄になる。そこで、先の応答に終わる第二の問答が来る（332a4ff.）。この問答におけるソクラテスの問いは、先の第一の問答の場合と異なり、ソクラテスは自分の立場を明らかにしてはいない。ここで、プロタゴラスの方は、疑問文に対して συνδοκεῖ μοι と答える（332b3）。明らかに、先に触れたように、プロタゴラスは尋ねられていること以上のことを、戦略的に答えている。他方ソクラテスは、332b3 に先立つ 4 つの問いに対する応答としては、第 1、間接話法、ἔφη、第 2、直接話法、ἔμοιγε δοκεῖ、第 3、直接話法、選択疑問文の選択肢、第 4、直接話法、ἀνάγκη を並べるが、「同意」を示す間接話法は用いていない。そして、このプロタゴラスの戦略的応答の後、第 6、間接話法、ἔφη、第 7、間接話法、ὡμολόγει、第 8、間接話法、ἐδόκει、第 9、間接話法、ἔφη、第 10、間接話法、συνέφη、第 11、間接話法、συνεχώρει、第 12、直接話法、οὐκ ἔστιν、第 13、直接話法、ἔστιν、第 14、直接話法、οὐκ ἔστιν、第 15、間接話法、ἔφη、第 16、間接話法、οὐκ ἔφη と並べ、そして、相反するものは一対一対応するという結論に関する問いに対して、先の間接話法の応答 συνωμολόγει で、結ぶのである。συνδοκεῖ μοι 後の「同意」が、半分はプロタゴラスの責任で、「『同意』」のような形で、ソクラテスの友らに伝えられる。そしてこの「同意」は、次の問答では、二人の「同意事項」ὡμολογήκαμεν という形で確認がなされてしまう（332d1; d3; d4）。

ソクラテスの友らにとって、「知恵が美しさの点で快に優るのか」もプロタゴラスの「知恵」を巡るもう一つの問題であったろう（309c9–12）。詩の解釈を挟んで再開される問答において、「快楽論」を巡って、ソクラテス、プロタゴラス、そしてソクラテスが仮想の問いに登場させる「普通の人々」、以上三者が異なる立場をとる。ソクラテスは、結果を考慮しない限りで、快を善、苦を悪とする立場に、プロタゴラスは、よい快と悪い快に分ける立場に立つ。ソクラテスは、更に、知は快に勝るものである

とする。プロタゴラスも従う。そこで、普通の人々が、快と善とを分離しながら、「善についての知が快に負ける」と考える事態を問題とし、ソクラテスは、プロタゴラスとともに、仮想の問答を行う。「善についての知が快に負ける」という事態があると思うことは、「無知によって誤っている」実態を、見誤った錯誤であると説得しようとする。もし普通の人々が、仮にその前提に立つならば、どう考えることになるかについて、ソクラテスが、普通の人々の仮想の答えを提案し、プロタゴラスに、普通の人々であればどう答えるか、考えを求める。ソクラテスの提案は、普通の人々の前提とその帰結であり、プロタゴラスが同意したこともそれ以外ではない。そして、358a 以下、ソクラテスは、普通の人々との仮想の問答を終えたとし、三人とも立場は共通だからと、プロタゴラス、プロディコス、ヒッピアス三者まとめて、三者に対して、自分の考えは正しいか問う。そして、プロタゴラスの直接の返答はソクラテスの語りから消え、間接話法による応答様式により、「すべての人々に、言われたことは真実であるとこの上なく思われた」ὑπερφυῶς ἐδόκει ἅπασιν ἀληθῆ εἶναι τὰ εἰρημένα と聞かされる。次に、快は善であり、苦は悪であるというソクラテスの説（弱い快楽説）についても、プロディコスに尋ねた返答として、συνωμολόγησε καὶ οἱ ἄλλοι「プロディコスが私の意見に同意し、ほかの人もそうした」と聞かされる（358b2–3）。さらに、三人に呼びかけながら、問いを続けたという。それに対する答えについては、「みなが私の意見に同意した」と、あるいは、「それらすべてのことに関して、われわれすべてが同意した」とまで、聞かされる（358c3; 358c5–6; 358d4）。ソクラテスが、普通の人々を説得する際に用いた論も、普通の人々の前提から来るところである。それが、なぜ、ソクラテス自身の主張として改めて問われ、また、プロタゴラスの声は、プロディコスらの背後に消えてしまったのか。確かに、普通の人々との議論の最後に、仮想の普通の人々に対する発言において、ソクラテスは、ソフィストたちを、普通の人々の立場と結び付けている。普通の人々は、知が快に負けると称する経験から、「快苦の秤量術」という知識について「無知」であることの多

い人々となる。他方、プロタゴラス、プロディコス、ヒッピアスは、普通の人々の「無知」に対して「徳の教師」として、ソクラテスの言うように、「無知を癒す」ということを受け容れるであろう。しかし、そこでいう「無知」とは、ともに「快楽の秤量術」の無知であろうか。また、「徳」とは「快楽の秤量術」となるのであろうか。少なくとも「同意」は、その内容において、ソクラテスの友らにとって問題となろう。

以上の物語的対話篇の応答様式から展開した考察は、ひとつの対話篇の全体像を探るための出発点であって、結論ではない。しかし、この考察から得られる一つの教訓は、対話を分析するに当たって、対話者間の「同意」と見られるものは、対話相手の承認に基づいた共同作業の結果であるが、それは、語られる者には、延いては、読者には、議論に開かれたものであり、後からの精査を要求するものであるということである。少なくとも、物語的対話篇は、間接話法によって、聞き手であることを確認させる働きをもっており、若干の「同意」を巡る間接の応答表現は、「同意」の内容への注意を促す働きをしている。その意味で、対話篇に隠された問題の構造を考察する一つの導き手になるのである。